1/10 赤旗

共に生きる

題字　金澤翔子さん

困った時は相身互い

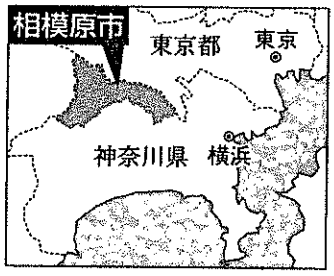
貧困ビジネスとたたかう元居住者 田中 嘉典さん(75)

「おお、よく来たね」

午前11時。師走の寒風が吹くなか、「相模原市生活と健康を守る会」の事務所には次々と人がやってきます。

なかには元ホームレスだった人、「貧困ビジネス」と呼ばれる劣悪な施設に居住していた人も。この日はカレーを囲む会。あちこちで笑い声が起きます。

田中嘉典さん(75)もかつて、生活困窮者を食い物にする貧困ビジネス施設に入居していました。同会の支援をへて生活を立て直し、昨年11月、同会事務局長になりました。



奔走の日々

「生活できない」。事務所には、生活困窮から駆け込んでくる人が絶えません。生活相談、制度利用の申請支援、日々の生活のサポート…。奔走する日々は「大変だけどさ、楽しいよ。困っているときは相身互い（あいみたがい）っていうだろ」。からっとした笑顔で語ります。

生活保護や社会保障制度について、数年前までは「考えたことすらなかった。今は日々、勉強」という田中さん。ここに至るまで波乱の道のりでした。

大学入学を機に札幌市から上京。卒業後はさまざまな仕事をへて35歳で道路清掃会社を設立し社長に。52歳のとき株で失敗し、会社を畳みます。

この日は会の新聞の仕分け作業。笑い声と冗談が絶えません＝相模原市生活と健康を守る会の事務所

自転車で市内を駆け回る田中嘉典さん

同じころ妻が病気で亡くなりました。

その後、建設業を始めるも、関係会社が倒産。田中さんも1200万円の借金を抱え、持ち家を手放し、親族の家に身を寄せました。「居候だし、肩身が狭かったね」。67歳でした。

そんなとき、市内の公園で不動産会社社長から「お金がなくても入れる」と生活保護でアパートの入居を勧められました。（別項参照）

狭い部屋に不当に高い管理費…。もらえる金額は週5000円。退去を申し出たところ「リフォーム代」として約90万円を請求されました。

「絶対におかしい」と訪れた日本共産党市議団。その後、同党市議が本会議でとり上げたのを機に、社長の逮捕にまでいたりました。市から転居費用も出て、入居者全員が退去することができました。

最後の砦に

今、心にかけているのは「貧困ビジネス」と呼ばれる無料低額宿泊所の入居者たち。同市だけで約240人います。「あの人たちを、放っておけない」。チラシを配り、声をかけ、生活再建の支援を訴えています。

活動はすべて手弁当です。ときには裏切られることも。「それも仕事。『やってやった』という気持ちじゃできない。自分も困っているときに助けてもらった。俺にできることだったら何か手を貸そうかって。それだけだよ」

年々削られる社会保障費、深まる生活困窮―。全国に草の根のように広がる「生活と健康を守る会」は、「困っている人の最後の砦（とりで）。本当に安心して相談できるところ」。「もっともっと多くの人に知らせたい」

（倉川章子）

相模原市「貧困ビジネス」事件　不動産会社社長は路上生活者などに声をかけ、同社のアパート12棟に40～50人を入居させ、生活保護を受給させ通帳などを管理。生活保護費を横領しました。17年、社長は詐欺罪などで有罪に。現在、元居住者14人が総額約1800万円の損害賠償を求め民事訴訟中です。